

## ■■ 「花祭」その後 ■■

須藤 功

かつて早川さんが歩かれた三、信、遠の山村に行くと、思わぬところで早川さんの話を村人から聞くことがある。中には早川さんとのつながりから郷土の民俗に関心をもつようになり、いまなおコツコツと研究をつづけている人もいる。

早川さんがその地域をくまなくまわられてから、もうすでに半世紀ほどたっているわけで、早川さんを知っている村人もかなりの年輩者ばかりである。私のように三十代の者には、早川さんとの面識などあろうはずもないのだが、“早川さん”などとさんづけで呼んでいるのは、実際の花祭や早川さんの著書「花祭」を通じて、無意識のうちにある親しみを感じているからかもしれない。花祭に興味をもっている多くの友人も同じように感じているらしい。花祭の一夜、あの舞庭にかもしだされる不思議な世界の中に、かつて早川さんもいたということが、面識のない私達にも早川さんを身近な人のように感じさせているのかもしれない。

花祭は日本のまつりや芸能に関心をもつ人なら一度は必ず訪れるまつりである。そして、早川さんの「花祭」を読む。しかし、一、二度花祭を見て「花祭」を読んだとしても、その本質をつかむことはまず難しいのではないかと思う。正直いって、「花祭」をそばに置いて花祭を見ても、目の前で行われている神事や舞がなんであるのかさえわからない場合が多いのである。

日本のまつりはいずれも多様なものを持っているが、その中でも花祭は特に複雑である。その複雑な一つ一つに疑問をはさんでいったなら、解決に数十年を要するに違いない。早川さんの「花祭」は、実はそういった疑問の生じたときに、解決の糸口になるはずの書物だったのだろう。そして、疑問をもった人がさらに花祭を追求してくれることを願っていたのであろうが、「花祭」以後、花祭に対する追求は余りなされていない。一つには、「花祭」が大著なるゆえに、全てがいつくされているだろうという錯覚にもよる。

その間およそ四十年余、時代の波は花祭をいろいろな角度から変えてきた。私が知るようになったこの十年ほどの間にさえ、少しずつ姿を変えているのである。

まつりは花宿、あるいは神社または公民館で行われ、その中心は舞戸である。土間の中央にかまどをすえ、そのまわりで神事が行われ、舞がまわれる。舞戸の上には天蓋のようなびゃっけというものをつるし、舞戸の上座に神座というのがあって、中央の神輿には氏神さまの御神霊を迎えてまつる。

花祭に参加するのは、村人全員で、一戸かならず一役はもつ。役には舞をまう人から炊事当番、あとかたつけなど、こまかくわけられている。まつりの中心になるのは花大夫あるいは花禰宜といわれる人で、その下にみょうどという役の人が数人いて、その人達でまつりを司ってゆく。

まつりは一週間ほど前から準備にはいる。祭当日は昼頃から神事がはじまり、ほぼ一昼夜つづく。ところによっては、夜が明けて昼が来て、再び夜のとばりがおりるところになってようやく終わるところもある。以前は一年を通じてもっとも楽しい日だったわけで、花祭をおえて正月を迎

えるのがその土地の人々の習慣であり、めぐりくる花祭の日をどれほどまちわびていたことか。

花祭は霜月のまつりである。秋のとり入れもすっかりすんで、やがてくる新しい年を迎えるために、地の悪霊を踏みしずめておくまつりとも考えられる。そのためにもともとは霜月に行われていたのであるが、現在は正月前に行われるのは二カ所だけで、あとはすべて正月に行われるようになってしまった。正月なら若い者も家に帰ってくるが、正月前では人手がなくてできないというのである。かつて奥三河から遠州にかけて二十数所に分布していた花祭の中には、人手が足りなくて中絶してしまったところもある。

花祭でいろいろな舞をまう舞子には、年齢と熟練の段階があり、先を越してまうということはなかったのであるが、今はそんなこともいえなくなってきた。下手でもとにかく若い者にまってもらわなくてはいけない。どうにか宥めて練習にでももらっても、一寸きついことをいうとやめるという。下手でも次第さえ変わらなければ、という人がいるかもしれないが、古戸部落のような場合もある。

古戸部落では、白山まつり、花祭、みかぐらという順で一連のまつりが行われていたのであるが、花祭が正月になったために、みかぐらが花祭の先になってしまった。みかぐらは願はたしの神事で、旧二月初午の鹿打神事のとき無事に育つことを願って氏子入りした二歳の子が無事に十五歳になったお礼の奏告するのである。その順序は花祭を考えるとゆく上で重要な意味があると私は思っているのだが、若者の都合だけでものを換えられると、大事なものを見誤ってしまう。それを許した古老にも責任はあるのだが。

変わったものの中には、豊橋の花祭のように楽しいものもある。

奥三河から豊橋の高師原に開拓移住してきた人々が、生活が安定すると共にふるさとを思い出し、神社をたてて花祭をはじめたのである。東海道線の豊橋の一つ手前、二川駅を出てまもなく左手に見える開拓地で、奥三河のいろいろな部落から人がきているため、まつりの太鼓の叩き方がそれぞれに違う。あいつはどここの部落だから、あいつの太鼓ではオレは踊れんという始末で、見ていて雑然としているが、ふるさとをしのんでいる人達には楽しい日に違いない。

東栄町月の花太夫である森下将覚さんは、早川さんに花祭のことをいろいろと教えたひとりである。早川さんも実によく訪ねたものだという。森下さんは厳格な人である。花祭の保存会長を務めていて、役場あたりから、花祭をテレビに出したいなどとよく相談にくる。すると森下さんは花祭は出せないと言下にいう。花祭というのは準備をふくめ神事、舞など一切をいうのだから、できない。しかし、花の舞や、鬼の出る舞だけならどうぞ、ただし、それは花祭ではないぞ、といのである。

その森下さんも、高齢のために花太夫の役を御子息にゆずろうとしている。また一つ世代が変わるのである。そういった変化をじっくりとみつめてくれる人が、もう数人いてくれればいいが、と私は花祭に行くたびに思っている。

(写真家・民族研究)